

## 人材養成・教育研究上の目的

日本史，東洋史，西洋史の3つの研究分野を設け，固有の諸問題の究明に当たります。また京都という恵まれた歴史的空間を活用して研究の深化を図り，3研究分野間の相互交流や比較の観点に立つ研究を行うことで，複眼的かつグローバルな視野を持ち，十分な研究能力を持った人材を育成します。学位取得後には，教育・研究職や文化関連業種といった，歴史についての専門性を生かした分野で活躍できることを目指します。

## 教育課程編成・実施の方針

幅広い視野の涵養と歴史全般にわたる知識の獲得を可能にし，専門分野に関する高度な研究能力を育成するために，演習（論文指導）及び講義科目を体系的に編成しています。複眼的な視点を養うために，日本史、東洋史、西洋史の各専門分野を越えて受講することもできます。また学生は指導教員の個別指導を受けつつ，自分の設定した研究課題の分析・考察を行い，史料に基づく新知見を加えた歴史研究の成果を修士の学位論文として作成し，創造的かつ批判的な能力の確立を目指します。

## 入学者受け入れの方針

史学専攻は，日本史、東洋史、西洋史の3研究分野を通じて，総合的な歴史を究明し，高度な専門業務に必要な研究能力と豊かな専門知識・教養を身につけ，学問の高度化・社会的要請に応えうる研究者，新しい時代的要求に応えうる職業人を育成しようとするものです。そのために，上記3研究分野に応じた専門的知識を有するとともに，それをもとに現代社会に内在する諸問題の歴史的背景を長期的・短期的に理解できる人材を，大学院入学者選抜試験において求めます。

## 研究・指導体制

各学生の研究の専門性を深めるために，徹底した個別指導を行うとともに，日本史・東洋史・西洋史の史学全般についても幅広く学べるような教育体制をとっています。

教員一覧(2024年7月時のもの。25年度には増加の可能性あります)

## 日本史領域

告井幸男	日本古代史
小原嘉記	日本中世史
母利美和	日本近世史
梅田千尋	日本近世史
小林瑞穂	日本近現代史

## 東洋史領域

藤本猛	中国前近代史
谷口淳一	西アジア中近世史

## 西洋史領域

桑山由文	西洋古代史
西岡健司	西洋中近世史
本田毅彦	西洋近現代史

## 本学の史学専攻の特徴

- ・最大の特徴は、所属教員の専門分野が、日本・東洋・西洋の各地域、古代～現代までの各時代を満遍なくカバーしているところです。
- ・そのため、大学院生は
  - ①自身の研究テーマに合わせて、最適な分野の指導教員を選ぶことが可能です。
  - ②学部生時代の研究テーマを発展させ、複数の教員の指導を受けて領域横断的な研究を進める体制も整っています（たとえば、東アジア史全体の中に日本を位置づけて日中交流史を研究したり、西アジア史をギリシア・ローマ期からイスラーム期まで連続的に考察したりなど）。
- ・学部授業よりさらに少人数授業となり（多くの授業がマンツーマンに近い）、女子大ならではのきめ細やかな論文執筆指導を受けることができます。
- ・史学領域専用の院生研究室には、パソコン・プリンタ・コピー機等の電子機器、各種参考文献、専用机などが揃っており、研究に集中できる環境が整っています。院生研究室で一日の大半を過ごす人もいます。

## 過去の修士論文の例(近年のものは本学HPの史学専攻欄を参照のこと)

日本史領域・・・「貴族社会の研究」，「室町時代における段銭制度と農民闘争」，「近世公卿の社会—冷泉為理卿記の考察—」

東洋史領域・・・「劉歆の思想とその展開～讖緯の形成と経学～」，「突厥キョルーテギン碑文の総合的研究」，「明代市舶太監の創設とその変遷—嘉靖期の裁革と税監の設置をめぐる—」

西洋史領域・・・「古代ギリシアにおけるハデス信仰—プルートの登場とその影響—」，「ハインリヒ獅子公とミニステリアーレス」，「戦後アメリカ・ユダヤ人とホワイトネス」

## 修了生の進路の例

- ・高校社会科（地歴）専任教員（京都市，滋賀県），博物館学芸員，地方公務員。博士後期課程や一般企業も（教員メッセージも参照）。

## 文学研究科 史学専攻 教員からのメッセージ

日本史領域では、それぞれの研究テーマに合わせ、史料や論文の読解を進めていきます。他大学から非常勤の先生も招き、隣接する時代の史料も含めて読むことで、研究の視野を広げていきます。古文書調査・整理に参加して、アーカイブズ・博物館業務にも対応可能な技能を習得することもできます。修了生の進路は、中学・高校の教員や博物館学芸員・文書館職員・出版社社員・公務員・一般企業社員など多岐にわたっています。（梅田千尋）

東洋史領域では、指導教員の下で各自の研究テーマにあわせた史料読解や文献の講読を行いますが、とくに1年目は東洋史領域に限らず、日本史領域など他の分野の特論も受講する大学院生が多いです。少人数ゆえに各自の研究テーマにそった個別指導を受けられるだけでなく、他領域の授業も積極的に受講して視野を広げることができます。（藤本猛）

西洋史領域では、指導教員の下で各自の研究テーマに合わせて史料や研究文献を読み込んでいくことを中心としつつ、必要があれば他の教員から関連文献の講読や語学の指導も受けていきます。また、西洋史の教員・院生全員での院ゼミが月1回程度開催され、自身の研究を俯瞰して西洋史研究全体の流れに位置づけられるような工夫をしています。博士後期課程に進学して、さらに研究を深める学生も少なくありません。（桑山由文）